

真摯に社会の持続性に向き合おうと、自立した分散型社会に進むしかない

東京大学名誉教授

養老孟司氏に聞く

養老先生は、『バカの壁』をはじめ数多くの本を出版され、意識の世界に閉じこもる現代人の考え方を鋭く指摘し、意識だけの世界からの離脱などを説かれてきた。たとえば、以前から「現代版の参勤交代」という2拠点生活を推奨されていたが、新型コロナウイルスのパンデミックを通じて現実のものとなってきている。

その養老先生は、パンデミックのほか、ロシアのウクライナへの軍事侵攻、脱炭素社会の実現、AIの発展など、この数年の激動の世界をどのように見ておられるのか。また、さまざまな社会課題、特に南海トラフ地震や自然環境問題の本質と対応方法などについて伺った。

京都への思い

村上 先生は『京都の壁』も上梓されていますが、京都とのご縁などを教えてください。

養老 若いころから、京都とは妙に性が合うのです。ずっと東京大学に通っていましたが、なにせ東京大学は、法学部と医学部が最初にできたことからわかるとおり、明治時代に西洋の学問を社会に応用するという目的で設立された最先端の大学ですから、学問というよりも実学を学ぶところなのです。ですから、学会で認められたことしか教壇で話せませんでした。京都大学にはそれがないので非常に気が楽でしたし、京都大学の学生さんも講義をすると反応がまったく違うのです。また、街もずいぶん感じが違います。笑い話ですが、京都で飲み屋に行くと、京大の先生だと言うと勘定を待ってもらえるのだけれど、銀座で東大の教授だと言うと、現金で払ってくれと言われる感じです。京都国際マンガミュージアムの館長をしていたときは、毎月京都に通っていましたが、今でも妻はお茶の関係でよく通っています。



Interviewer
京都総研コンサルティング
執行役員エグゼクティブフェロー
村上 憲司

また、京都は本当に古い都市です。都会なのに、どうして千年以上ももつのかという点について興味があります。千年もたせるためのいろいろなノウハウがあるはずですよ。

欧米的な論理の限界

村上 ここ数年は、新型コロナウイルスによるパンデミック、ロシアのウクライナへの軍事侵攻、脱炭素社会の実現、AIの発達など、世界的に非常に激しい時代となっています。これらを、どのように見ていらっしゃいますか。
養老 世界はここ何十年か、欧米式の1対1の関係、つまり「ああすればこうなる」的な考え方で片づけられる問題をずいぶん片づけてきましたが、それでは片づかない問題や副作用がい



ろいろ出てきているように思います。「プリデイクションアンドコントロール」(予測と制御)という典型的に理性的な対応方法でやってきたのですが、人為的に作成されたとみられている新型コロナウイルスによるパンデミックが発生したり、ウクライナ戦争が勃発したりしています。自然環境問題も然りです。

「ああすればこうなる」的なやり方が身につく文化と身につかない文化があるのです。日本は優等生ですからよく消化してきましたが、そうではない世界があります。私は、自分が日常暮らしている理屈と欧米型の論理が違うことにストレスを感じることがあります。そういうストレスがあちこちで出ているのではないのでしょうか。

中東問題は、キリスト教とイスラム教が、長い歴史のなかでも本当に折り合わなかったものだと思います。中国も、折り合うところもあるでしょうが、肌合わないところがあるのでしよう。ロシアもピョートル大帝のときに、明治維新のように西欧の文化を思いきって取り入れたのですが、完全な西欧化には至っていません。そのトラウマのようなものは、ロシア人にしかわからないと思います。ロシアの軍事侵攻のときの世界の論調は、日本が盧溝橋事件を起こしたときの反応と似ているのではないかと思います。異文化の人が理解することはかなり難しいので、非常にやっかいな問題ですが、誰か本気で止められないものかと思えます。戦争が誰の得にもなっていないことは明らかです。多数の市民が犠牲となり、ダムが決壊して農地が水浸しになったり、歴史的な建造物も破壊されたり

しています。戦争を起こす背景は理解できなくても、チェルノブイリのような原発事故などが起こるまで止められない、などというようなことは変です。また、コロナワクチンは、もともと日本人は、京大の山中先生が唱えているファクターXのような、ある程度の免疫を持っているなかで、ウイルス全体ではなく表面のスパイクタンパク質だけに対する抗体を作るワクチン(m-RNA)を接種しています。ウイルスもよく分かっていて、そこが変異しやすいので、改良したワクチンを重ねて接種しています。アメリカでは、今はほとんどワクチン接種をしていないようですが、そのワクチンが人間の細胞のどこに入って、どういう作用をするのかとても心配しています。やはり欧米的な頭で考えて「ああすればこうなる」というやり方の副作用が出てきているのだと思います。

災害が動かす日本の歴史

村上 これだけ変化が激しいと、自分の立ち位置を改めて確認しておかないと、前に進めないのではないかと思います。

養老 健康的な考え方だと思います。そうしたことを考えないで済んできたこれまでの方がおかしいのです。

たとえば、京都の最大の弱みは物流でした。平安時代が「方丈記」にあるような終焉を迎えたのも、基本的には物流の問題だといわれています。当時は天災が多く、日本全国で凶作だったうえに、東南海地震も起こり、京都も半年ぐらい地震で揺れたそうです。都の生活物資は、



直下型地震がくると、東海道は破壊されますので、物流は途絶えます。

武家政治が終わるのは江戸時代ですが、普通は嘉永6年（1853年）のペリー来航が日本史の分岐点ということになっています。けれども元号を見ると、翌年に東海地震と南海地震が発生したので、嘉永7年ではなく安政元年に改元されたのです。ということは、ほぼ千年続いた武家政治は地震で始まって地震で終わったといえます。つまり日本は、見方によっては天災で動いているのです。

もともと河川が運んできた泥のたい積地で、海岸近くまで平地が続く場所は危ないところです。東京は非常に古いので、かなり泥が溜まっています。確か2500mぐらいの谷に泥が溜まってできた土地です。東京は、首都直下型地震というよりもまず首都圏直下型地震が発生します。つまり首都圏に近いところの相模トラフなどの日本海溝の海溝型地震が発生し、さらにその地震が、日本にはいたるところに活断層がありますから、直下型地震を誘発する可能性があるのです。

南海トラフ地震に対して高知県などではかなり具体的に動いています。東京の動きは鈍いように見えます。津波が来れば高層ビルは陸の孤島になります。水の確保やトイレはどうするのでしょうか。私は東京に出てきて、高層ビルのエレベーターに乗るのが嫌なのです。途中で止まるとどうしようもありませんから。私は戦後の物がない食料難の時代を経験しましたので、日常生活で必要不可欠なものをすべて人頼みにしてもいいのかと思います。まさか、明日には

コンビニの棚が空になっているとは想像さえできないのでしょうか。きっと誰かが何とかしてくれる、と思っているのではないのでしょうか。それで本当に安心安全といえるのでしょうか。

大地震の後にどう生きるか

村上 大地震が起これば大変なことになると頭では理解していても、実際には高層ビルは増えています。

養老 地震の大きさ、富士山の噴火を伴うか、首都直下型を伴うかなどは、なかなか予測できませんが、問題は起こった後のことです。日本史は、大地震とともに変化してきましたので、今度も新しい時代になる可能性があるわけです。それに対してどのような態度で生きていくのが大事です。

たとえば新幹線は、浜松あたりで津波がきてズタズタになります。丹那トンネルはどうなるでしょうか。つまり交通網はすべて断たれます。そういう事態になった後、その復旧をどうするのでしょうか。経済損失額を京都大学の藤井教授が試算していますが、復興には莫大なお金が必要になります。そのときの国際情勢は分かりませんが、今年のように食料価格が高騰しているも国民が飢えないように食料を海外から購入するしかありません。一体どの国から多額の借金をすることになるのでしょうか。

エネルギーはもちろんです。スマホが典型です。時々通信障害などで大騒ぎしていますが、今はスマホがないと生きていけないような感じになっています。富士山や浅間山が噴火

すべて田舎からのものでしたので、物資が届かないとすぐに飢えてしまいます。運ぼうとする山賊や海賊が出没しますので、その流通を保証するのが武士の仕事だったので。それで武家が力をつけ、江戸時代まで続く武家の時代になっていくのです。

東京の弱みも物流です。物流に問題が起こると東京はあつという間に大変なことになります。東北の地震の場合でもコンビニやスーパーは2日しかもちませんでした。ですから、私が今最も気にしているのは、南海トラフ地震です。以前、京都大学総長をされていた尾池先生（現静岡県立大学学長）が2038年ごろに発生すると予測されています。関東大地震からもう100年経ちましたからね。南海トラフと首都圏の



養老 孟司 (ようろう たけし)

1937年神奈川県鎌倉市生まれ。1962年東京大学医学部卒業、解剖学者。1995年東京大学教授を退官、東京大学名誉教授。京都国際マンガミュージアム名誉館長。『ヒトの見方』(筑摩書房、1985年)以降、一般向けの文筆活動を行う。2003年、『バカの壁』(新潮新書)が毎日出版文化賞特別賞を受賞し、大ベストセラーとなる。主な著書に、『からだの見方』(筑摩書房、1988年、サントリー学芸賞)、『唯脳論』(青土社、1989年)、『人間科学』(筑摩書房、2002年)、『からだを読む』(ちくま新書、2002年)、『死の壁』(新潮新書、2004年)などの「壁」シリーズ、『虫の虫』(廣済堂出版、2015年)、『老い方、死に方』(PHP新書、2023年)ほか多数。

は、合理的で経済効率が良いということ、大都市に集中してきましたが、システム自体が大きくなりすぎました。人に頼らないで生きていくにはどうすればいいのか、を考える必要があります。小さな地域的な集団で自立できるよ

うに、もう一度社会を作り直すべきではないでしょうか。そうすれば、自然環境にも目が届きます。大地震が来たときに、水と食料とエネルギーぐらひは自分が見える範囲で調達できれば安心できます。また、地方の小さなシステムだと、人の幸せとか人生の意味とか考えている暇もなく、生きるための具体的な生活を送ることにあります。そして、一人ひとり、誰がこれをやってくれている、ということがわかります。「みんなのために、貴方がいなきや困る」と言われる社会になると、生き甲斐があるにきまっています。

村上 以前から推奨されていた「現代版の参勤交代」は、2拠点生活というかたちで、コロナ禍以降現実のものとなってきました。地方にと

大都市集中型社会から自立した分散型社会へ

つまり、これまでに人に頼りっぱなしの癖がついていますので、自分たちでやっていくという決意を国民が持てるかどうかだと思います。

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

AIやメタバースはその姿を見極めることが先

村上 ChatGPTやメタバースなどが発展

しています。ただ、リスクも大きいと感じます。養老 私は、ゲームが好きです。囲碁、将棋、花札などと同じですから。今のゲームは面白いですよ。うまく作っていますので熱中します。戦争も、ドローンで攻撃し合うくらいなら、両者がメタバースの世界の中で思う存分やり合えばいいのに、と思ったりしています。

AIやメタバースについては、行くところまで行っからでないと、何がおかしいのかがよくわからないのではないかと思います。「メタバース推進協議会」(一般社団法人)の代表理事の仕事も引き受けていますが、まだしっかりできていないものの倫理などを考えることには少し無理があると考えています。

したら、その火山灰は東京まで到達します。火山灰はガラスの微粒子ですから、さまざま電子機器に影響をもたらします。停電でもしようものなら、スマホが使えなくなろうものなら、大騒動になってしまいます。スマホが使えなくなったらどうすればいいのかを考えていないのです。その意味で、スマホのない日とか週とかを設けて、システムを止めたらいいのではないかと思っています。

つては再生のチャンスにもなります。養老 もともとは、うつ病患者が増えてきていて、医学部でしたから相談に来る人がいたので、やっぱりライフスタイルが良くないので、バランスをとれるような生き方に変えるという意味で提案したものでした。当ても少し考えていたのですが、災害のことを考えると、ライフラインが復旧するのに3か月から半年かかる」とすると、その間に避難する場所が必要になります。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

うに、もう一度社会を作り直すべきではないでしょうか。そうすれば、自然環境にも目が届きます。

かと思っっています。

つまり、これまでに人に頼りっぱなしの癖がついて

いますので、自分たちでやっていくという決意を国民が持てるかどうかだと思います。

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

が最近、みんな都会に出てきてしまっ、お盆に帰るところがない人が増えてきました。

す。以前は、みんな田舎を持っていました。「うまくいかなきゃ、田舎に帰って百姓をする」などと言っていましたからね。ですから、少し前までは、実は2拠点生活だったのです。ところが

未来の日本は、少数分散型の社会だというシミュレーション結果があります。今のような、東京、大阪、名古屋のように都市をどんどん大きくしていくという大都市集中型は続かないというものです。従来

SDGsや社会課題解決への 取り組みと課題

村上 SDGsや社会課題解決に取り組み企業経営の流れも強まっていますが、日本企業は環境問題をはじめ社会課題の解決には相応に取り組んできました。欧州発の急な流れに乗ることに違和感を持つ企業もあるかもしれません。

養老 全体の考え方が「ああすればこうなる」という方式でシステム化されてきて、これから先もそれでやっていかないとみんなが納得しない状態に世の中がなっていますから、それに異議を申し立てても駄目です。そうではない具体的な道も見つけていくしかないのだと思います。企業の方は、現場で具体的に考えていますので、それが一番確かなことですから、その方向に進めばよいと思います。

典型的なのは、岡山県の銘建工業という会社は、集材材を使った木造で5、6階のビルを建てています。木造はダメというルールがあり、基準をクリアするためには億単位の費用が必要になるので、国土交通省も支援しながら実現しました。間伐材を活用して作るのですが、枝葉は、当初は燃やして間伐材の乾燥に使っていましたが、規模が大きくなってからはバイオマス発電に使っています。つまり、葉っぱから木くずまで、従来はゴミとして扱われていたものを活用して電力を作っているのです。

また、岡山県の真庭市では、街全体でバイオマスをやっています。従来はゴミとして扱っていた木くずや葉っぱをすべて燃やした熱を使っ

て発電するという方式です。それでエネルギーを自給しているのです。島根県の津和野町の役場を退職された方が、バイオマス発電機を買って、徐々に増やしているのですが、その発電機は全部フィンランド製なのです。日本は、国土の68%が森林という森林大国なのに、儲からないからなのか、バイオマス発電機をほとんど作っていないのです。

すべての地域でバイオマス発電にする必要はなく、場所によっては小水力発電を活用できるでしょう。虫捕りによく行く山奥の村で、小川にバケツぐらいの発電機を入れて、それでテレビを見ていました。この方法によって、子どもたちは、電気の仕組みから始まり、さまざまなことを理解するようになります。そういった意味でも、流れの速い小川が多い日本は非常に有利なのです。大規模な電力会社だけに依存するのではなく、小水力発電の利用を進めた方がよいのです。いずれは、それらが大事だという時代が来るはずですよ。企業として、真面目に社会の持続性を考えるならば、むしろそういうところ、目を向けると良いのではないのでしょうか。ひとつ気をつけなければいけないと思うのは、人間は一所懸命働いて成果を得ようとする。たとえば、特に自然を相手にする場合、農業が典型的ですが、みんな畑を耕します。農業の歴史は1万年ですが、地面をほじくり返してきました。今やアメリカでは1割は土を耕さない不耕起栽培ですし、リングゴ農家の木村秋則さんも、試行錯誤の結果、最後は放置しています。草を抜かないのです。隣の果樹園の人が、木村さんの果樹園は草が生えっぱなしで虫が湧いて

困ると文句を言ってきたので、もう一度夕方に見に来てください、と言ってみてもらったら、虫は隣の果樹園の方から木村さんの方へ飛んでくるのです。農薬がないのですから当然で、虫からみれば居心地の良い方に行くにきまっています。

アメリカのゲイブ・ブラウンという農家の方が、『土を育てる』という本を昨年出版されました。化学肥料や除草剤などの農薬を使わない典型的な有機農法をしているのですが、面白いのは土を耕さないのです。畑の地面にじゃがいもを並べ、上に枯草を被せるだけなのです。秋になって枯草を取ると、ちゃんとじゃがいもが育っているのです。土を耕す行為は、地面の中にある菌類のネットワークをわざわざ壊すことになるのです。別に労力を惜しむわけではなく、地中にもともとある菌類の力を活かしているのです。これは、施肥もしなければ、草刈もしないという木村さんのリングゴが典型ですよ。実は医者もそうです。患者が良くなれば医者は喜んでいますが、本当に治療する必要があったのか、と聞かれると怒ります。労力をかけること、成果を得ることは別です。労力をかけることが目的化していないかよくよく考える必要があります。

村上 日本の農業のポテンシャルは高いように思います。

養老 メタバースやAIの世界になってきているのに、農業は非常に中途半端な状態だと思っています。自然のものを半分利用しながら手を加えているのですが、上手に手を加えているかというところが本当はそうでもないわけですよ。嫌というほ



ど殺虫剤を撒いて、化学肥料を与えています。昔の方がよっぽど利口だったと思います。そこまで人手をかけて自然を壊すような農業をするくらいなら、思い切って、現代社会の考え方に沿って人工的、理性的にコントロールできる水耕栽培にしてはどうでしょうか。蛋白源はコオロギなどの昆虫を使うとか言っていますが、そんな中途半端な方法ではなく、牛の細胞を使って培養肉にすればいいのではないのでしょうか。他方では、徹底的に放置して野生に戻すようなことをやっているわけです。儲かる、儲からないなどと言いながら、中途半端にうるうるしている状態なのですが、農薬や化学肥料をやめて有機農法にすれば、それらのコストがかかりませんし、付加価値があるので競争力もあると思います。

複雑な自然環境問題

村上 脱炭素社会の実現の流れも強まっています。

養老 大きなシステムは効率的で合理的なのは当然ですが、たとえば太陽光発電は、東京都が進めているように家の屋根にソーラーパネルを設置すれば良いのですが、大規模なソーラーパネルを山の真ん中に設置したりしていますので、環境のために環境破壊している状況になっています。さらに、それらのパネルが劣化した後は、誰がどこでどのように片づけるのでしょうか。そこまですっかり考えているのでしょうか。

実は、私は「環境」という言葉をあまり使わないようにしています。「環境」という言葉で辞書で調べると、「自分を取り巻くもの」と出てきます。その裏には、自分という核が存在することになります。それがどんどん大きくなると、「今だけ、金だけ、自分だけ」というようになってきます。「環境」という言葉がこれらの意識の醸成を促しているように感じます。けれども実際には、田んぼは米を育み、私たちはその米を食べて生きているわけですから、田んぼと私たちの身体はつながっているのです。皮膚から内側だけが自分だと勘違いしてしまい、感覚的なつながりがまったく切れてしまっています。その切れた感覚が自然環境問題を発生させているのです。特に、欧米の文化からは理解できないかもしれません。「田んぼ」と自分がまさか有機的につながっているとは考えないのではないのでしょうか。だから、欧米流の考え方

は一応理屈として理解はできませんが、肝心の一番深いところの感情として納得できないところがあるのです。

自然環境問題は、簡単ではありません。地球温暖化も、疑わしきは罰するという考え方で二酸化炭素の削減を進めています。二酸化炭素を減らせば済む問題ではないと多くの専門家は考えています。最近よくご紹介しているのですが、イギリスの昆虫学者のグルーソンが、1990年〜2020年までの30年間で世界中の昆虫が8〜9割減ったと報告しています。温暖化すると増える虫もいるはずなのに、全体として減っているのです。全体として減っているという感覚は、小学生から虫を捕ってきた私にはよく分かります。しかも、無人島やドイツの自然保護区でも同じように減っているのです。昨年と今年、佐渡に行ったのですが、トキの生育のために農薬を減らした農業を実践していますので、やはり虫は多いですね。ただ、無人島でも減っているわけですから、農薬の問題だけではないのです。私が疑っているのは、実は電磁波です。スマホがこれだけ世界中で使われていますから、人類をはじめとする地球上の生物全体が電子レンジの中に入っているような感じ。電磁波は、従来は脳への影響ばかり問題にされてきましたが、生物の生殖機能（少子化）への影響も懸念しています。

村上 本日は、このところの激動の世界の動きの捉え方から、自然環境問題の複雑さや今後の日本社会の進むべき道など、とても有益なお話をしていただき、まことにありがとうございます。